

も 林 の 話

第1話
渡島森林管理署
岡田 直人

私は生まれも育ちも大阪で、住んでいた地域に森林と呼べるような場所は無く、あるとしても、街の景観に馴染むように植えられた木々くらいでした。そのためか、私の森林に対するイメージは本の挿絵のように、どこか宙に浮いたものでした。



人工林から収穫されたカラマツ

においがする。湿ったにおい、それは地面を覆う苔のにおいかもしれない。鼻をくすぐるさわやかなにおいがする。玉切られ積み上げられた丸太からもする。森の中では様々なにおいがする、それが森林でこの1年を通して学んだことかもしれない。



キハダの内皮

の丸太が積み上げられていました。私の描いていた森林像とは違い、けっして美しいだけのものではありませんでした。雪解けで地面はぬかるんで歩きづらいし、服も汚れるし、寒い。「これがトドマツだよ。」と教えてもらい、触ってみれば松ヤニが手につきました(結局お風呂に入るまで取れなかった)。その後何度も森林に入りました。そのたびに色々な木があることを教えてもらいました。針葉樹のトドマツ、カラマツ、そしてエゾマツ、アカエゾマツ。これらは北海道の山づくりには欠かせない樹木です。広葉樹だと、皮を剥くと鮮やかな黄色を見せてくれるキハダ、湿地を好む田んぼ開墾の目安にも重宝したハンノキ、樹皮にトゲがあるハリギリ等々。特に広葉樹はその特徴を挙げ始めるときりがありません。

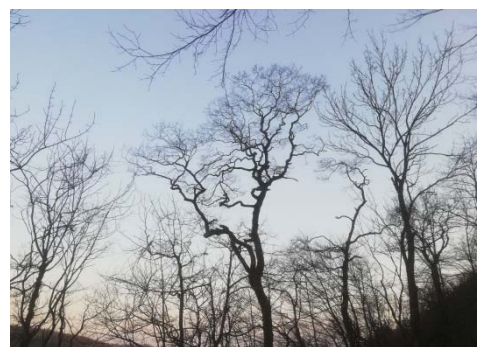


ハリギリの大きな葉っぱ

私たち人間がひとりひとり違うように、木も違う。そして当たり前前のことかもし

ちなみに、キハダの黄色い内皮は胃腸に良く、漢方薬にも使われています。一度かじってみましたが、良薬口に苦しとはまさにその通りです。

大阪にいた時は、恥ずかしながら木を針葉樹、広葉樹以上に分けて考えたこともありませんでした。もちろん色々な種類の木があるということは知ってはいましたが、分けて考える必要もなかったのです。しかし、実際に森林に行くと、否が応でもその種類の多さに驚かされます。また、同じ種類の木でも、環境によって、その姿形は千差万別です。



稲妻のような枝ぶりのハンノキ

れませんが、木も生きているのです。

森林に入れば服も手も汚れるし、イキロ歩くだけでも一苦労だし、暑いし寒いし、獣のにおいもしたり。しかし、そこでそれぞれのスタイルで生きる木々の姿に圧倒される。そうして生きた木は、丸太になった時に独特なおいを出します。そういったにおいは「フィトンチッド」という揮発性成分で、殺菌・殺虫の効果等を持つらしい。木が自分を菌や虫から守るための成分だそう、樹種によってもその成分は異なるそう。姿やにおい、森林は生きた木々の個性で溢れています。